1933（昭和8）年12月1日

『家の光』12月号で賀川豊彦の小説『乳と蜜の流るゝ郷』が予告される

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

1933（昭和8）年12月号の『家の光』に、新年からの「本誌新連載読物の予告」が設けられ、賀川豊彦による小説『乳と蜜の流るゝ郷』の予告が短い文章で紹介されている。まず、この予告の意図をみていく。次に、家の光編集長はなぜ賀川に連載執筆を依頼したのか、さらに賀川がこの依頼をなぜ「快く引き受けたのか」を読み解く。

『乳と蜜の流るゝ郷』の予告全文

この予告は、めったに目にする機会がないこと、賀川がこの小説に託した思いや願いの一端をみることができるので、全文を紹介したい。

農村の荒廃は極度に達し、都会の混沌は言葉に尽くせない。それを救ふ道は産業組合の外には無い。しかし現下の産業組合が果たして理想的形態を持ってゐるかどうか？　作者は自ら體驗（たいけん）した苦い産組運動を通して茲（こゝ）に新しき理想を小説の形で示さんと念願してゐる。東北の一寒村に育ち共愛互助の運動に恵まれぬ一青年が如何に苦心し

賀川豊彦（1888～1960）、写真提供／賀川豊彦記念松沢資料館

て自己の村を再建するか？　それにまつはる愛欲の軌道は何を示すか。作者は先づ『心田』より始むべきを信じ、農村に於ける良心生活の発展史を如実に描いて、三千万農民と日本の都市産業組合運動との関係を、文明再建の立場から読者に理解してもらはうと希望している。

時は非常時だ！　反産運動は今や、沸騰点に達してゐる。日本は産業組合の外に救ふことは出来ない。そして、この運動こそ最も劇的な問題を提供するのだ。

以上が予告の全文であるが、この短い中に「それを救ふ道は産業組合の外には無い」「日本は産業組合の外に救ふことは出来ない」という文章が出ていることから新しい小説の中心テーマは「協同組合精神」になる、ということが想定できるであろう。

新連載をなぜ賀川に依頼したのか

雑誌編集者にとって誌面の本格的なあり方が頭から離れることはあるまい。『乳と蜜の流るゝ郷』掲載当時の家の光編集長であった梅山一郎は賀川に新連載を依頼するまでの経緯を次のように述べている。

「『小説（読み物）』はどうあるべきかを捜し求めて、いろいろな試みをやって、右往左往していた。当時流行しはじめた農民文学に目をつけ、和田傳氏等の作品を載せたことがあった。これは、同じ風俗習慣に生きる農家の人たちが登場したので、『家の光』にふさわしい読み物だと思ったが、大衆には受けなかった。つまり娯楽性に乏しかったからである。

それなら時代の流行作家に頼んで書いてもらえばどうなるかというに、読者と同じ風俗習慣に生きる人々は登場せず、きまって、生活苦も知らない都会の男女の恋愛話になるのが常であった」

と人選に苦労したことを述べている。「時も時、産業組合中央会では産業組合拡充五か年計画をつくって、産業組合の発展に拍車をかけだした。（略）

そういう時代の潮流の渦巻いていたときである。わたしは『死線を越えて』（略）その後『海豹の如く』『一粒の麦』によって好評を得た、キリスト教会の牧師で社会運動家の賀川豊彦氏に目をつけた。

そのとき賀川氏は、神戸消費組合を創立して、これを育成しつつ全国の消費組合運動に熱をあげていた当時であった。賀川氏ならば、わたしどもが多年捜していたよい読み物を作ってくれるだろうと期待して依頼したところ、快く引き受けてくれた」

と賀川に目をつけた理由を述べている。梅山編集長の慧眼に感心させられる。この慧眼があったからこそ『乳と蜜の流るゝ郷』が誕生したのである。

なぜ、賀川は連載を快く引き受けたのか

梅川が語るように賀川は、1920（大正9）年にミリオンセラーとなった『死線を越えて』に続いて1931（昭和6）年に『一粒の麦』、1933（昭和8）年に『海豹（あざらし）の如く』を著した。

それぞれに「序」を設け、自分の意図するところを明らかにしている。

『一粒の麦』の「序」では、

「今日我々に欠けたるものは、神に対する愛と、困苦を突破する信仰である。私は日本の山奥に埋れた麗しい物語を思ひ出しながら、日本の行末をこの物語のうちに発見せられんことを私の愛する読者たちに要求したいのである」

と述べている。小説は東三河を舞台に、果樹や畜産などの適地適作、遊休地などの有効利用で食糧の確保を図る「立体農業」を推奨するなどして農山村の生活向上について展開している。

『海豹の如く』の「序」では、

「日本の光栄ある海の歴史を、忘れる者は忘れよ。私は日本をして、永久に、海の寵児であらしめるために、謹んで、この書を海国日本に捧げる」

と述べている。そして、小説は瀬戸内海の漁業から始まり、本州、四国、九州、北海道まで日本の漁港という漁港に触れ、漁業の発展についての取り組み等を展開している。

賀川は、二つの著書を通して疲弊している農村漁村の救済策を記述したが、そこで展開できなかったのが「協同組合の役割」ではなかったのか。協同組合の理念、貧しさのなかで協同組合の大切さ等を展開するために、賀川は新連載の打診を「快く引き受けた」のではないか。その決意が、冒頭で見た予告文のなかに「日本は産業組合の外に救ふことは出来ない」という一文を入れた、といえよう。

『家の光』1933年12月号に掲載された予告記事

＜参考文献＞
『家の光』
（産業組合中央会、1933年12月号）
『乳と蜜の流るゝ郷』
（家の光協会、1968年）
『賀川豊彦全集』
（キリスト教新聞社、15巻1962年・16巻1963年）